

森の奥まで続く獣道を、ブランカを先頭にして歩いていく。ブランカの武器の様子をルークがすぐ後ろで観察し、ユノが後方にも目を配りながらアオガネトカゲを探す。

（一方方向だけを指すとも限らないようだ。やはりアオガネトカゲの居る方向に反応するのだろうか）

前を歩くブランカの手には、燦然と輝く武器が握られていた。その刃先を細かく動かし、より強く光る向きに体ごと向き、慎重な足取りで進んでいる。

「あれ、固化泥石の塊じゃねえか？」

ユノの声で振り向くと、ユノが進行方向を指さしていた。もう一度前を見ると、ルークには断定こそできないものの灰色の巨石のようなものが見えた。

「…念のため戦闘準備をしてから進むぞ」

ルークは手を握るのと開くのを繰り返して手袋の具合を確かめると、剣を抜いた。そしてユノが銃弾を込め終えるのを待ってから、さらに慎重に進んだ。

巨石の前に動く影を見たルークは、進もうとしていたブランカの肩を掴んで止める。

「…尻尾が切れてるから『アイツ』なんだけど、様子が変だ」

ユノはルークよりもはっきりとその姿を捉えていたが、眉をひそめながら見たものを語った。

「手負いなのに地面に降りて、この距離で逃げずに石食ってるってのが、気味悪いな」

「またこちらの姿を見つけたら逃げて行くなら良いんだが…勝手にどこかに行くのを待っている余裕はない」

ルークはちらりと巨石の前の影を見る。大きな口と舌を使って一心不乱に巨石を削っているように見える。ブランカも同じように目を細めながらじつと向こうを見ていたが、何を思いついたか目を見開いた。

「いきなり襲い掛かったらびっくりして逃げたりしませんかね？」

「お、良いじゃねえか。オレが目玉狙えば簡単にできるしな」

ユノは早速膝をつき銃を構えたが、ルークは苦言を呈した。

「それは奴を確実に倒す必要が出てくるだろう、巨石にでも当てて威嚇するだけで十分だ」

するとユノは顔だけ上げ、ルークに反論し始めた。

「おいおい、銃弾は城を離れてる今は貴重なんだ、岩に当てる分なんか無えよ」

「じゃあ俺が魔法で追い払えばいい、弾を温存したいなら銃を下ろして待ってろ」

「ルークの魔法じゃ、後ろの固化泥石まで吹き飛んで台無しだろ！」

「そ、それくらいの調整はできる」

二人が言い合う中、ブランカが割って入る。

「こ、声抑えないと気付かれますって」

二人が面食らって黙ったのを見て頷くと、ブランカは言葉が続けた。

「遠くから攻撃できればいいんですから、魔石とかどうですか？」

ルークはハツとして鞆に視線を移しながら、魔石の残数を思い出した。

（ミナートではまだ補充していないが、セヌイ村で買ったものがいくつもあるな）

ルークが頷くと、ユノも大人しく銃を下げ、ルークに視線を向けた。『意見を合わせる』という意味だということを、ルークは理解していた。

「なるほど、魔石か。賛成だ」

ルークが鞆から魔石を取り出すと、握って魔力を込める。手を開いた時には、魔石は雷を帯び、黄金色に染まっていた。それを見て、ユノが手を伸ばした。

「手負いにしたならしっかり倒す方が良くと思うけど、今回はしゃーなし。投げるのは任せろ」

ユノが魔石を手にとると、軽い動きで放り投げた。しかし魔石は勢いよく飛び、ちょうど巨石の前に落ちた。

それに運よくアオガネトカゲが近寄ると同時に、魔石はその雷の力を解放した。四方に放たれた細い稲光の筋が、アオガネトカゲの金属質の鱗に吸い寄せられていく。アオガネトカゲはその脚をばたつかせ、魔石から遠ざかるように逃げ出した。

「上手くいきましたね！」

ブランカが声を上げたのを皮切りに、三人が慎重に固化泥石の前へ歩み寄ると、アオガネトカゲが居た場所に変色した鱗が落ちていた。ルークが拾い上げてみると、表面が変色前よりざらついていた。ユノもルークの拾い上げた奇妙な鱗を見て首を傾げる。

「逃げるために自分から外す、なんてこたアねえよな……」

「まず小刀を入れないと剥がせない代物のはずだからな」ルークも不思議に思ったまま鱗の土を軽く払って鞆にしまうと、目当ての固化泥石の巨塊を観察し始めた。ルークはなるべく固化泥石に触れないようにしながら周囲の環境も見る。

（この大きさは見たことが無い。それに、木々に隙間が無く、最近降ってきた形跡も無い。いつからここに存在するのか、考証のしがいがある）

ルークは固化泥石の表面を見るが、蒿や苔の類は付いておらず、この清泉の森にはまだ馴染んでいないと感じられた。

塊の下部に目をやると、アオガネトカゲが齧り取った跡なのか、何本もの溝が乱雑に刻まれていた。

「本当に石を食べていたみたいですね……」

ブランカは固化泥石の前にしゃがみこみ、溝に手を伸ばした。

「やめろ！」

ルークは咄嗟に腕を伸ばし、ブランカの手を掴んだ。

『異物』は危険だ。なるべく触れるな」

ブランカは目をばちばちとし、ぎこちないながらも無言でうなずいた。それを見てルークは詰まっていた息を吐いた。

「はあ、冷や冷やさせる……あ」

ルークは気付いて、握っていた手をゆっくりと開いた。

その様子をユノは微笑ましく思いながら見ていたが、ルークの視線に気づくと口笛を吹いて誤魔化した。

「……何だ」

「いやー、なんでもー？」

ユノは更にそっぽを向くが、急に動きを止めた。かと思えば、いきなり銃を構えた。

「ちよい待ち、アイツ戻ってきやがった！」

ユノはアオガネトカゲの姿を目視で捉え、今まで打撃ち損ねた分と言わんばかりにすぐさま銃弾を放った。遠くで柔らかいものに着弾した音こそ聞こえるものの、ユノは視線を戻さず、銃身が冷えるのを待たずに次弾を装填し始めた。

「目に当てたのに真っすぐ走ってきやがる！ なんなんだアイツ！」

ユノの悪態を聞き、ブランカも武器を構える。ルークは剣を抜き、アオガネトカゲを迎え撃つ態勢を整えた。

しかし、目の前に現れたのは、先ほど対峙した時の青い鎧の姿ではなかった。鱗が剥がれてむき出しになった赤い肌を裂くように岩が突き出していた。しかし苦悶の表情は無く、残った左目を不規則に動かすその様は、異物が魔物化した物とよく似ていた。

三人を前にして、アオガネトカゲは咆哮を上げたが、金切り声にも近い奇声が耳を劈いた。

「右側が死角になってる！ 刺せ、ブランカ！」

ユノは背中側の鱗が無くなったアオガネトカゲに銃口を向けるが、右目を撃たれたことで警戒しているのか、アオガネトカゲは近づいてきたブランカではなくにユノへと飛び掛かった。ユノが銃を下げるのと同時に、ブランカがアオガネトカゲの死角から頭部に向けて飛び掛かりながら刺突した。その勢いでアオガネトカゲの身体は

軌道を変え、ユノは回避が遅れたものなのか避けきった。

頭部を貫かれたにも関わらず、アオガネトカゲは頭を振ってブランカを振り払おうとし始めた。ブランカはアオガネトカゲの口を踏みつけながら武器を引き抜き、距離を取った。

「脳を損傷しても動く……まともな攻撃は効きそうに無いな」

そう分析しつつ、ルークは魔法の発動準備を始めた。  
(炎は森の中では危険、水や土では攻撃が局所的すぎる。不得手だが風魔法を試すか)

ルークは剣を収めると、息が上がりそうになるのを抑えながら呪文を唱え始めた。

「其れは風、天へと還り、ただ一つを切り裂く——（ウインドラ）！」

風の刃がアオガネトカゲを取り囲むように生み出され、アオガネトカゲに数多の傷を刻んでいく。さすがのアオガネトカゲも怯んだが、逆に言えば致命傷を与えきれていないのと同義だ。アオガネトカゲは術者へと目を向けた。しかしその眼球はどこを見据えるでもなくグルグルとせわしなく動き続けていた。その不気味さがルークの視界でちらつき、集中を途切れてしまうと、彼の魔力によって統率されていた風は散ってしまった。

「！　しまっ……」

気が付けば眼前には小さな牙が無数に生えた口、岩を削り取ったであろう嘴、そして暗い喉の奥に——。

「危ない！」

ブランカの声が聞こえたかと思えば、突如としてルークの視界に光が射しこんだ。それは下から上へと昇っていくと、視界に隙間を生んだ。そして胸を突き飛ばされる感覚があり、ルークは受け身を取りながら地面へと倒れた。すると頭の上を何かが飛んでいく。液体。赤い。血だと気付いた。べちゃり、と音を立てて落ちた。

「ルークさん、無事ですか!？」

手を差し伸べられている。その後ろに、魔物の首から下が転がっている。

「ああ、すまない」

ルークは手を伸ばそうとしたが、その奥で蠢く姿を見て声を上げた。

「まだ動いている、目を逸らすな！」

伸ばしかけていた手を首の落ちたアオガネトカゲに向け、防御魔法を展開した。アオガネトカゲの突進を間一髪で防いだ。その隙を突くように銃声が響いた。樹上から心臓を貫くように銃弾が一つ。しかしそれでも魔法の壁を爪で引き裂こうと藻掻く動きは止まらなかった。

ルークは意を決して、死してなお襲い来る魔物の姿を直視した。魔物の肉の断面など、ルークは見慣れているはずだったが、もぞもぞと肉が動き、膨れ上がっている

様は、体の芯が握りつぶされるかのような感覚すらあった。口の中に酸味のようなものが広がり、思わず口元を押さえた。

（固化泥土が喉に詰まっている……いや違う、あれを中に肉体が回復し始めている。間違いない、あれは……）

ルークは樹上に構えるユノを見たが、連続で射撃を行ったからか次弾を装填せずに銃身を冷ましていた。ブランカに視線を移すと、先ほどのルーク自身と同じようにアオガネトカゲが回復していく様を見ているにも拘らず落ち着き払っていた。ルークはブランカに駆け寄ると耳打ちした。

「喉の奥に固化泥土でできた核がある。先ほど切った部分より身幅二つ分奥だ。やれるか？」

ブランカはルークの顔を見て何か言いたげに口を開いたが、またアオガネトカゲを一瞥すると大きく頷いた。

「はい、やってみせます」

ブランカが淡く光り続ける武器を構え直し、ルークも剣を抜いた。ルークは防御魔法を解く時機を窺う。アオガネトカゲの動きが緩んだのと同時にルークは防御魔法を解いた。アオガネトカゲは好機と言わんばかりにブランカに飛び掛かり爪を振り上げたが、それをルークが剣で弾く。尾も鱗も失い、頭部も半分しか再生していないアオガネトカゲは随分と軽く、仰け反るようにしながら宙を舞った。それを見計らってブランカがアオガネトカ

ゲの喉元を一閃した。武器は一瞬強い光を放ち、それからすぐに光を失った。

「わ、つとと」

ブランカは武器を両手で持ち直したものの刃先に刺さった魔物の体重までは支えきれず、槍先を地面に降ろした。ルークは剣を構えたまま魔物を観察していたが、ブランカが武器を引き抜いても、ユノが木から降りてきても、アオガネトカゲは動き出さなかった。

「やったじゃねえか、ブランカ！」

ぼーっと立っていたブランカにユノが歩み寄り、頭を撫でた。ブランカはキョトンとしていたが、顔を上げてユノが笑っているのを見て、「私が……」と声を漏らした。

ルークはアオガネトカゲの屍を一目見て、すぐ消える心配がないことを確認すると、ルークもブランカに声を掛けようとした。

（ブランカの動きが急に洗練されたように感じるが、武器の光と関係があるのだろうか、いや、そもそもその光が何なのか……その全てが憶測の域を出ない）

そうして彼は、たった一言だけ告げた。

「……よくやった、上出来だ」

ブランカだけでなくユノも面食らったような素振りを見せたが、ルークはあえて背を向けながらしゃがんだ。取り出した小刀でアオガネトカゲの喉元の切れ込みを広げると、核となっていた固化泥土が真つ二つに割れて出

てきた。その内側には、魔力のようなものを帯びた金属の破片が埋め込まれるようにして内包されていた。

「これが変貌した原因か」

ルークは鞆から封印の魔法陣の刺繍が入れられた袋を取り出すと、核をその中に入れた。

「他の部分も調べたいが……解析魔法を掛けてみるか」

ルークは死体に手をかざすと、目を瞑って集中力を高め始めた。徐々に魔物の体内へと自身の魔力を染み込ませながら、情報を吸い上げていく感覚。そして魔力が全体に行き渡ろうとした瞬間、ルークの瞼の裏で想起していた光景に強い視線を放つ目が現れ、彼を凝視した。

「!!」

ルークが目を開けると、アオガネトカゲの軀は一瞬にして魔力に浸食され、風に吹き上げられた塵のように散逸していった。

「どうしたんだよ、顔真っ青じゃねえか」

「だ、大丈夫ですか？ 汗が……」

ユノやブランカの心配の声をよそに、ルークは動悸の止まない胸を押さえながら周りを見渡す。人はもちろん、魔物の姿も無い。

（なんだ、あの目は……）

ルークは息を整えると、二人の顔を見る。二人の目は、『あれ』とは全く違う表情を湛えていた。少し眺めていると、勝手に動悸も収まっていった。

「……戦闘を終えた直後に集中力の要る魔法を使うのは負担が大きいだだけだ。失敗した分は、町に戻ってから核を解析したら取り戻せる。早急に戻ろう」

ルークは立ち上がると、まだ少し震える手で小刀をしまった。赤く染まった空の下では、血が付いたままであることは気に留まらなかった。

〈十六話へ続く〉